

桐が谷通信

CHUBU GAKUIN UNIVERSITY
CHUBU GAKUIN COLLEGE

第45号

2011年12月12日

発行 中部学院大学 宗教委員会
中部学院大学短期大学部

〒501-3993
岐阜県関市桐ヶ丘二丁目1番地 TEL (0575)24-2211

「2011クリスマスを迎える」

志村 真 (短期大学部宗教主事)

震災の年としての2011年

3月11日(金)午後2時46分18秒に発生したマグニチュード9.0の大地震と、波高16m、最大遡上高40mにも上る大津波は、日本国内で死者・行方不明者19471人(11月22日現在、警察庁)、さらにはアメリカとインドネシアであわせて7名の死者・行方不明者を含む甚大な被害をもたらしました。そして、今なお、多くの方々が避難生活、仮設住宅での暮らしをしておられます。

冬がやってまいりました。寒さが募る東北の被災地を覚えて、心からの祈りを捧げるものです。

振り返ってみますと、2011年は日本のみならず世界的にも様々な自然災害にまみえた年でした。大震災の翌日3月12日には長野県で地震が起き、3名の方が犠牲となっており、こちらの復興にも私たちは関心を向けなければなりません。

さらには、9月には二度の台風上陸を経験しました。台風12号による被害は死者・行方不明者が92人、台風15号によっては死者・行方不明18人を出し、多くの家屋が被害を受け、せき止め湖の問題も発生しました。

世界に目を転じますと、2月22日には、ニュージーランドで大きな地震が発生。日本人28人を含む181人が犠牲となりました。また、トルコ東部では、10月23日と11月7日に地震が起き、両地震を合わせて、日本人1人を含む300人以上が亡くな

りました。タイでは、チャオプラヤー川のはんらんによって多くの民家、工場が水没し、日系企業にも大きな経済的被害が出ています。あまり報道されてきませんでした。この洪水による死者は、11月初週現在、602人にも上ります。

本学の支援の取り組み

東日本の被災状況を受けて、本学では大学としての取り組みのみならず、サークルや部活動、学科・ゼミナール活動を通して、また個人による取り組みを通して、様々な支援活動を行ってきました。

大学は震災直後の3月14日には「東日本大震災支援センター」を設置して情報を収集するとともに、支援の具体化に取り組みました。これまで2



東日本大震災巡回写真展
(関キャンパス・ピュアライブラリー)

回の「震災復興支援活動」(第1回は8月7～11日に宮城県登米市に。学生38人参加。また、第2回は同12、15日に野球部の36人が遠征の合間に参加。)続いて8月15日には、「ふんばろう東日本支援プロジェクト」に各務原キャンパスの学生6名が参加しました。

また、教職員の方々に地震・津波発生直後から被災地を訪問、支援された方も多く、その領域も福祉、医療、心理、教育、産業、宗教と幅広くかかわって来られました。

宗教委員会でも、支援センターの協力を得て、10月25～27日に関キャンパスのピュア・ライブラリーで「東日本大震災写真展」を、仙台の河北新報社との共催で行い、一般市民の方々にもご参加いただきました。これは名古屋の金城学院大学、名古屋学院大学との巡回写真展という形で実施したもので、この地区のキリスト教主義大学間のよき交流ともなりました。

聖書時代との関連から

共通暦前1470年(1628年とも)、地中海東部の火山島ティーラが大噴火を起こしました。この噴火の破壊力は、1883年に発生したクラカタウ(インドネシアの火山島群)の噴火と津波(36000人以上が死亡)、2004年のスマトラ沖大地震とインド洋大津波(22万人以上が死亡)を超えるものでした。クラカタウ噴火では巨大な津波が発生し、ジャワとスマトラの海岸部が壊滅しました。一方、ティーラの噴火と地震は地中海の震源域を破壊し、また水深が1000mであったことから、引き起こされた津波は50～200mであったと言われています。津波は震源から120km離れたクレタ島を襲い、内陸深くまで浸食しました。その結果、ヨーロッパ最古の文明と呼ばれるクレタ島の「ミノア文明」は滅亡してしまいました。(滅亡はアカイア人の侵略によるとの説もある。)

ジョン・ペアマンによれば、この噴火と津波は聖書思想に影響を与えたと言います。たとえば出

エジプト記15:8「流れはあたかも壁のように立ち上が(った)」や、暗闇の災い、火の柱、雲の柱の記述は、津波や噴火を描述したものと考えられています。また、イスラエル/パレスチナは古来、多くの地震が起きており、地質的にも大きな断層が確認されています。ですから、イエス時代にも地震が起きたことは想像に難くありません。歴史書では確認できないようですが、ルカ福音書13:4では、イエスが「シロアムの塔」の崩壊と犠牲について言及しています。その他、旧新約聖書には様々な自然災害を語っていると思われる表現が多く出てきます。

ということは、イエスを含む聖書の登場人物、著者は地震や津波を含む自然災害とその後の人間社会の格闘について熟知していたのです。その上で、そうした苦境の中で祈りをつむぎ、互いに励まし合い、いやしを实践されたのです。そのイエスの誕生を記念し祝うのがクリスマスです。そして、苦境の中つむぎだされた聖書のことばを読むことは、誠に時宜にかなったことではないかと思うものです。(以上、主にJames W. Douglass, *The Nonviolent Coming of God*, Orbis Books, 1992, 166-167を参照。)



関キャンパスを彩る創作クリスマスツリー



現代英語に生きる聖書慣用句

小野 経 男 (岐阜済美学院長)

学院長の小野経男先生が今年6月、聖書の語句と英語の慣用表現に関する「辞典」を出版されました。「豚に真珠」「目からウロコ」など、聖書由来の慣用句は多くありますが、先生はそれらを集大成なさいました。そこで、ご著書に私たちを招いていただきたく、エッセイを書いていただきました。

今年(2011年)6月に出版された拙書『聖書に由来する英語慣用句の辞典』(大修館)についてやさしく解説せよとの依頼があり、許された字数内で試みてみます。

聖書、なかんずく欽定訳聖書(1611年)は英語の発達に多大の貢献をし、これを知らないでは英語をマスターできないとまで言われています。貢献度が一番高い点は英語慣用句です。比喩的に使われている慣用句がどのような意味を持つかを知るには聖書に遡らなければなりません。言い換えれば、英語の多くの慣用句は欽定訳聖書に発しているのです。のちの英訳聖書にも何らかの形で継承されています。この英語慣用句を以下の3つに分類して例証してみましよう。

語句の比喩表現

Abraham's bosom : (アブラハムの胸 → 死後善人が行くところ、天国)

ルカの福音書16章22節に出てくるキリストの寓話の中で、貧乏人が死んでアブラハムの懐、すなわち天国に連れて行かれる場面です。この語句はMax O'Rellという人のJohn Bull and his Islandの中で次のように使われています。This habit of walking is kept up by the Englishmen to a very advanced age ... when they knock off, it is to take to their beds, and prepare to go and sleep in Abraham's bosom. (この散歩の習慣は高齢になるまで英国人は続ける。散歩をやめるのは床に就き、天国に行って永眠する準備を整えるときである)

文の比喩表現

The axe is laid to the root of the trees :

(斧を木の根元に置く → 破壊を始める)

マタイの福音書3章10節に出てくるバプテスマのヨハネが発した警告です。この文を少し違った形でHazlittがEssaysの中で使っています。It was not till I saw the axe laid to the root, that I found the full extent of what I had to lose and suffer. (破壊が始まって初めて自分が失って苦しむものがどんなに大きいか分かった)

大きな文脈からの比喩表現

Blow / send to kingdom come : (御国に送る → 爆死させる)

マタイの福音書6章10節に出てくる有名な主の祈りの一節です。この比喩的意味は文脈全体から出てくるので、例文はあまり見かけませんが、英語母国語話者が次のような文を造ってくれました。The policeman was blown to kingdom come when he tried to touch the unexploded bomb taken away from the building. (その警官は建物から取り出した不発弾に触ろうとして爆死した)

以上のような慣用句をアルファベット順に配列し、辞書の形にしました。まず各慣用句の源である欽定訳聖書を出し、例文を添えた後、欽定訳聖書以外の特徴ある英訳聖書を列記し比較検討しています。また、必要に応じてキリストが公生涯で使われたアラム語や旧約聖書のヘブライ語、新約聖書のギリシャ語の慣用句にも言及し、比較しています。一つの例として、アラム語慣用句の意味との比較を見てみましょう。Bury my father : (私の父を葬る → 最後まで父の面倒をみる)

はアラム語の慣用句でして、take care of my father until he dies（父が亡くなるまで世話を見る）の意味を持っています。しかし、そのままの意味で欽定訳聖書には引き継がれなかったために、英語の慣用句にはなりませんでした。

これらの詳細はこの紙面では解説しきれませんので、興味ある方は直接拙書を参照していただきたいと思います。また、「英語教育」（2011年12月号）に書評が載っていますので、参考になります。

幼児教育学科 NAGARA CHRISTMAS TRAIN

有川 一（短期大学部幼児教育学科講師）

「クリスマス」と聞いて思い出されるのは、昨年度実施した“NAGARA CHRISTMAS TRAIN”です。地元の長良川鉄道と短期大学部幼児教育学科との共催で、2010年12月23日（木）に実施しました。

「列車の中で“あそび”をやってもらえませんか？」という唐突なお願いから始まったわけですが、幼児教育学科は“あそびすと”養成として、子どもたちにあそびを提供することができる能力を養っていますので、その実践の機会として快く引き受けました。学生11名（全て1年生）、教員3名、計14名が集まり、列車の中でのあそび空間をプレゼントするためにアイデアを絞りました。

当日、お座敷列車にクリスマスデコレーションを施した“クリスマス特別車両”は超満員！動くあそび空間に子どもたちのテンションも最高潮です！手あそびからスタートし、折り紙、紙飛行機、ぬり絵、クリスマスリース作り、大型絵本の読み聞かせ、歌、エプロンシアターなどなど、次々にあそびを展開していきました。歓声を上げる子どもたちとあそびに熱中しつつ、窓の外を流れる風景を楽しむこともできるといった非日常空間を、みんなで一緒に楽しみました。

実は当初、関駅～郡上八幡駅（片道約1時間）だけであそびを提供する予定でしたが、子どもたちのリクエストに応じて夢中になっているうちに、終点の北濃駅まで着いてしまいました…（片道約2時間）。

お客様の中に本学の卒業生というお母さんがみえ、1年生の活躍ぶりに感服してみえました。また、お孫さんを連れのおばあさんに学生が折り紙

を教わるといふ、思わぬ所での交流もありました。

終点までの往復の約4時間、子どもたちと私たちはあそび続け、関駅にて子どもたちを見送りました。手を振る子どもたちの表情には“満足感”があふれていたように思います。

地域を駆け抜けた“動くあそび空間”の中で、私たちは子どもたちに最高のクリスマスプレゼントを提供できたのではないかと考えています。

今年はさらにグレードアップし、“あそびスター NAGARA サンタ TRAIN”として、2011年12月24日（土）、25日（日）に実施することになっています。参加する子どもたちにとっても、学生達にとっても、実り多きものになることを祈っています。

（“あそびスター NAGARA サンタ TRAIN”についての詳細は、長良川鉄道（<http://www.nagatetsu.co.jp/>）をご覧ください。）



2010 Nagara Christmas Train 車中でのあそびの展開

グローリアホールのポジティブ・オルガンについて

笠井 恵 二 (本学宗教総主事)



この12月に各務原キャンパスのグローリアホールにポジティブオルガンが入りました。関キャンパスには立派なパイプオルガンが設置されているのに、各務原キャンパスでは小さな電子オルガンで礼拝を守っていることに物足りない思いがしておりましたが、2009年秋に開催された学生支援委員会において、卒業生の記念品として「ポジティブオルガン」を購入することが提案されました。その後さまざまな検討を行った結果、ガルニエ社のものは響きが力強く、100人規模の礼拝でも十分使用できること、関キャンパスのオルガンと同じ会社であることから保守・調律・整音を一括して依頼できること、また近隣の名古屋教会、南山教会でも導入の実績があることなどから、ガルニエ社による2ストップ、手一段鍵盤のポジティブオルガンを、2009年、2010年、2011年の合同卒

業記念品として購入することが決定されました。2010年4月に契約が締結され、このたびめでたく納入のはこびに至りましたことは、キリスト教の精神による教育を重視する中部学院の一層の充実のために喜ばしい限りです。

ポジティブとは「室内用」という意味で、14世紀ころに大型オルガンと区別されて室内用に意匠され貴族の室内調度品とされ、図案意匠もその線にそって発達してきたわけですが、今回購入する楽器は柔らかい低音を奏でる Gedackt8 と、はっきりとした旋律を奏でる Flote4 という2種類のストップを備え、バロック時代の標準的な調律基準に近いA=415ヘルツと、ピアノや近代の他の楽器との合奏に適したA=440ヘルツを切り替えることのできる機構を有しています。

パイプを納めた本体には頑丈なナラ材が用いられ、菩提樹を彫刻して金箔を施した装飾がアクセントになっています。電動送風機は演奏者の座る椅子の中に納められていて、これら一式を運搬して別の場所で演奏を行う事も可能です。今後、この美しい楽器の荘重な響きが、学生だけでなく近隣の人々にも親しまれ、各務原キャンパスの雰囲気が一層豊かなものになっていくことを確信しております。

チャペル礼拝(チャペルアワー)について

これまでのチャペルアワーの内容が、本学ホームページに掲載されておりますのでぜひご覧下さい。



中部学院大学・中部学院大学短期大学部ホームページ

URL: <http://www.chubu-gu.ac.jp/>

左側のメニューから

「中部学院について」→「キリスト教教育について」→「チャペルアワー」とお進み下さい。

(<http://www.chubu-gu.ac.jp/about/christianity/chapelhour/>)



2011年度 クリスマス礼拝

「暗闇を照らす光」

日本聖公会・東日本大震災被災者支援
一緒に歩こう！プロジェクト・スタッフ 松本 普 先生

日 時：12月22日(木) 11:00~12:15

(第2時限の講義は行いません。)

会 場：関キャンパス グレースホール

2011年度のクリスマス礼拝に、松本普先生をお招きできますことを、ここから感謝したいと思います。先生は長年、名古屋市における野宿労働者の支援に関わって来られました。この度の震災にあたっては、地震・津波発生の直後からほぼ毎週、被災地に出かけられて、支援物資の運搬、滞日外国人（特にフィリピンからの方々）の安否確認に奔走されました。

現在は、日本聖公会が仙台市に設置した「いっしょに歩こう！プロジェクト」のスタッフとして活動しておられます。このプロジェクトのホームページに書かれていますミッション・ステートメントに、松本先生をはじめとするスタッフ方の思いが伝わってきますので、下に掲げたいと思います。柔和であたたかな思いを持って、クリスマス礼拝に集いましょう。(志村)

「わたしたちは、東日本大震災により困難を負って生きる人々に敬意を払っていっしょに歩きます。わたしたちは、被災地の方々の生活と地域の再創造に向けていっしょに歩きます。わたしたちは、主イエス・キリストが、共に歩いてくださることに励まされていっしょに歩きます。」

講師プロフィール

1947年 東京生まれ。1953年 エリザベス・サンダース・ホーム卒園。1975年 日本聖公会・聖ヨハネ修士会小山修道院散会。同年 名古屋「越冬炊き出しの会」前身の設立。1984年 笹島人権センター設立。(炊き出し、夜回り、識字学校、緊急宿泊所、入居支援など) 2001年 NPO法人「ささしま共生会」設立。2010年 NPO法人「セカンド・ハーベスト名古屋」理事。

クリスマス献金のお願い

宗教総主事
笠井 恵 二

クリスマスは、主イエス・キリストがご自身のすべてを人々の幸せ (well-being) のためにささげつくしたことに因んで、少しでも私たち自身の一部を人々の幸せのためにささげ合うことを実践する季節です。今年は特に、東日本大震災の被災地を覚えて献金したいと思います。一方で、これまで支援していた献金先を被災地にすべて振り向けてしまえば、必要を感じる諸団体は立ち行きません。そこで、例年送金しているところにもお送りしたいと思います。

ですから、昨年より力を入れてご献金いただければと感謝です。みなさまのご協力をお願いいたします。(尚、昨年2010年度は、181,448円の暖かい献金をいただき、17の施設・団体、活動に献金いたしましたことをご報告します。)

「2011年度中部学院大学・中部学院大学短期大学部クリスマス献金」

—真に平和な共生社会の実現に向けて—

献金予定先：①日本キリスト教協議会エキュメニカル震災対策室 (JEDRO) ②日本キリスト教協議会「ケニア基金支援献金」③キリストへの時間、④岐阜いのちの電話、⑤愛知老人コミュニティセンター、⑥(福)あゆみの家、⑦岐阜・野宿生活者支援の会、⑧(福)親隣館 ほか